

島根教神協会報

発行日/令和7年11月15日

発行者/島根県教育関係神職協議会

第44号

島根県教育関係神職協議会

会長 廣江 直澄



今夏、再度読み直したい書物が二つあり『国家の品格』（藤原正彦著）と『民間防衛』（スイス政府編）でした。夏の参議院議員選挙で俄かに『外国人問題』が『日本人ファースト』というフレーズと共に脚光を浴び、各党の政策論議になり有権者にインパクトを強く与えていました。そこから各メディアは一部政党に対して「排外主義」「差別主義」「人権軽視」と非難轟々のキャンペーンを展開しました。果ては「辞めるな石破」「踏ん張れ石破」と過半数割れの選挙結果で民意が出たはずの政権与党の総裁が、反保守の活動家と呼ばれる人たちに応援デモをされるという前代未聞の状況になりました。

『国家の品格』は20年前にベストセラーとなった本で、数学者の著者がグローバルズムに傾倒している日本社会に警鐘を鳴らし、日本人が元来有していた民族の誇りや素晴らしさを再認識することを訴えたものでした。令和になり著者の危惧は現実のものとなり日本社会が融解していく危機的な状況となりました。時の政権の政治判断がこの状況を招いたのは間違いないですが、有権者である国民がそれをよしとして来た結果でもあるのです。そこに国民の世論を誘導した勢力があるのも間違いないと『民間防衛』を読んだと思いました。永世中立国のスイス連邦内閣の要請で連邦法務警察省が作成したもののの中から書き出してみます。（以下抜粋）

●「我々を取り囲む国々が武装し続ける限り、我々は国家の防衛を怠ることはできない」

「敗北主義―それは猫撫で声で最も崇高な感情に訴える。諸民族の間の協力、世界平和への献身、愛のある秩序の確立：結論は時代遅れの軍事防衛は放棄しよう」
「新聞は、崇高なる人道的感情に

よって勇気づけられた記事を書き立てる」

●「敵はわれわれの抵抗意志を挫こうとする」

「核武装反対 それはスイスに相応しくない」「農民たち 装甲車を諸君の土地に入れさせるな」「平和、平和を」「汝 殺すなかれ 婦人たちは、とりわけ戦争に反対する運動を行わなければならない」

●「敵は意外なやり方で攻めてくる」
「我が国に、我々の教義や生活様式にとって好ましくない退廃的思想、新聞、書籍、映画、ラジオ放送、テレビ放送の、どのようなものも入れさせないようにしよう」

他国を侵略する戦争は、武器を使わずともあらゆる方法で時間をかけて遂行するものです。その証左として、首相官邸周辺で起きた「石破やめろ」の4千人規模のデモの様子は地上波テレビも新聞各紙も報道しませんでした。日本は他国に確実に狙われ、国民の生命と財産が蝕まれ奪われていると感じて読み直した二冊の本でした。

現職教員等の研修会に参加して

松江支部 廣江 直澄

今回も大学などで研究している専門家と会員による実践報告の形式で、遠隔と対面方式で行われた。講演を行なった専修大学法学部の鈴木潔教授は白幡天神社宮司でもあるので、研究と実践を兼ねた報告はデーターを元に分析、評価をされているので興味深いものだった。冒頭に「神職自身の思想・意識やスキルの問題」でアップデートの必要性が指摘されていたが同感である。多様な主体による連携の必要性は、別の研修会で他の専門家も指摘していたので明らかにトレンドなのだろう。神社が主体となる社会的意義が6項目挙げられていた。また奉務社では湯の花神事、菖蒲葺きへの参加、そして神職の出張授業と成果を出していると話された。

報告Ⅰは広島県の観音神社宮司川口潤先生だった。広島県の平和教育は、現在日本の教育現場で行われる平和教育のベースとなっている気がする。根幹にあるのは戦争↓原爆投下↓悲惨↓平和の希求である。用意されたスライドには破壊尽くされた市街地にえびす神社の姿があり、その神社の復興が被爆してからそう時間が経たない中で行われたという話を聞いた時には衝撃だった。この写真は見たことがなかった。この世とは思えないような惨禍を受けた広島で、人々の復興に向けて立ち上がっている姿が、神社と共にあった事に感銘を受けた。また、音楽の教師が伝統的な雅楽との邂逅によって大いなる刺激を受けた事例や、その他にも神社で諸活動を展開されている報告があった。戦後は国、郷土、伝統というものが忌避されて来た風潮の中、教員の本心（良心）が

求めているものにアプローチをされた先生は、神社（神職）が地域の連携の主体となる取り組みを実践されたと思った。

報告Ⅱは島根県の三部八幡宮宮司糸賀明広先生だった。神社とは無縁だった先生は結婚を機に神職になる覚悟を決め鎌倉からゆかりも無い島根県に移住され宮司になられた。当会副会長の勧誘もあり会員になってからは積極的に研修会にも参加し研鑽を積んでおられる。先生は自分のキャリアを生かし、できる事はないかと思案して地域の子どもたちの数学嫌いに課題を見つけた。そこを突破口に、神社で寺子屋を始め江戸時代から行われていた算額という方法を用いた。人脈を作り交流を広げ神社に興味を持つ教員や保護者の中から理解者、協力者を誕生させたのである。この取り組みは水面に広がる波紋のように少しずつ県外にも広がりを見せてい

る。これは、先生の逆境の中でも前向きに捉え、気付きと行動力によって為せる取り組みである。

多様な主体による地域連携の一例であり、ユニークな経歴を持つ先生の活躍が斯界の活性化に繋がればと期待する。

全国大会に参加して

仁多支部 植田 由紀子

姫路駅に降り立つと気温は三十五℃近く。日本全国何処も暑さは変わらないようだ。北口を出ると広々とした大手前通りが伸びており、その先には姫路城大天守。国宝「白鷺城」は青空のキャンバスに描いた絵画のようであった。北口から歩いて約十五分、お城の手前に大会一日目の会場である射楯兵主（いたてひょうず）神社は鎮座している。地元の方からは「総社（そうしゃ）さん」と呼ばれ、

親しまれているようだ。掃除の行き届いた境内は清々しく、時折気持ちの良い風が吹いていた。

十二時半、創立六十五周年記念式典挙行。開式に先立ち関係物故者に黙祷を捧げる。寶來会長の挨拶では「教育の重要性は日本の宝である子供たちの行方を左右することにある。我々はそれを自覚しなければ」と強調。來賓の田中恒清神社



本庁総長は全教神協に対する要請として「日本人としての心を育みわが国の将来を担う後進育成」について触れ、垣田宗彦兵庫県神社庁長は人材

育成と教育の重要性を述べ、全教神協の活動に期待を寄せた。また今年は、阪神・淡路大震災から三十年の節目を迎えた年でもある。谷山由夫兵庫県教神協会長はこのことに触れ、そのような年に近畿ブロックで大会が開催されることは感慨深いと語った。

式典に続き、令和七年の総会が開催され、全ての議案が承認された。総会後には射楯兵主神社にて正式参拝。ご奉仕された神職の方々のお作法が美しく、受ける側の気持ちも引き締まった。祭式の厳修を改めて感じた。西本和俊宮司のお話も大変興味深く、話し方のお手本のようにあった。

十五時半頃、中央研修会。皇學館大學教授の渡邊毅氏による基調講演からスタート。人物伝の重要性を事例を交えながらお話しされ「生き方や考え方から人生の指針を得て自身の生き方を

見つめ直し、文化や社会への理解を深めることで生きるための知恵や勇気を得る」ことを述べられた。講演後に行われた分科会では活発な意見交換がなされ、あつという間に時間が過ぎた。



十九時頃、懇親会。姫路キャッスルグランヴィリオホテルに移動して開催。清興では一弦須磨琴保存会による一弦琴の演奏を堪能。一弦琴とは一枚の板の胴に一本の弦張った、共鳴胴を持たない原始的

な弦楽器のこと。昭和三十二年に発足して六十八年、その響きは故郷を思わずにはいられない美しさであった。



二日目九時、大和大学教授得能弘一氏による記念講演。ご自身の教員経験を述べられ、生徒自身に考えさせることの大切さなどを語られた。「根気強く」という言葉が頭をよぎる。全体会では今回は分科会の発表の場ではなく、意見や所感を述べる場となった。直接思いを伝える場がないこと

が懸念される中、こういった機会を設けてくださったことはとても良いと感じた。この場で出された意見が少しずつ改善されていくことを願ってやまない。レポート作成後閉会式典では同日が広島への原爆投下の日であることから、閉会に先立ち黙祷、平和であることへの感謝とこれから先も続くことを祈った。

「神道精神に根ざした真の日本人を育てる」

第六十四回全教神協全国大会大会宣言である。

二年ぶりに参加。久しぶりの顔にホッとするとともにこの気持ちが大切なのではないかと感じた。誰かを思う心、何かひとつでも自分のものになりたいという向上心。育てるにはまず自身の姿勢を見直さなければ語れないと思う。第六十五回全国大会は佐賀県。まずは教育勅語を暗記してみるから始めたい。

第十四回 中国ブロック研修会

出雲支部 山崎 寧子

八月二十日、二十一日に岡山県主催の中国ブロック研修会が、岡山県津山市で行われた。徳島県の吉田先生も参加されて、島根県からは、4名、総勢23名の参加であった。

一日目、岡山県の会長小坂先生が宮司をされている作樂神社を会場に、作樂神社について講話、続いて講義が行われた。



講義1は「津山の洋学について」津山洋学資料館次長 梶村明慶先生

宇田川一族が、明治になり、漢方医から蘭方医に転じ、植物学、化学書など代を重ねても洋学に携わって来た事。箕作氏は、西洋諸国を理解する為、世界地理・歴史を研究し、通訳などで、外交交渉に活躍したなど、他藩と違い洋学が盛んとは日本の近代化に対し先駆けた考えを持つ藩だと思った。

講義2「津山の歴史」津山郷土博物館次長 乾康二先生

津山は美作国の中心地として栄えていた。森忠政が領主になって、川の流れなどから、鶴山に城を築き城下町ができた。城西が津山の玄関であったが、津山駅が出来て人の流れが中心部に集中するようになったなど。森忠政は、織田信長の小姓森蘭丸の弟というのは、意外だった。

各県の情報交換会では、会員の高齢化、新会員の募集についてなど、各県悩みは同じだった。

会場を津山鶴山ホテルに移して、懇親会。島根県を皮切りに3回目となる、利き酒大会が行われた。連勝を飾るのは、鳥取県の岡村兄弟。恐るべし！



二日目、中山神社を正式参拝。美作国の一宮で現在の社殿は出雲の尼子晴久氏の戦捷奉賛で再建された。

その後、見学研修で津山郷

土博物館、津山洋学資料館を訪れ、昨日の講義内容を思い出しながら見学した。

岡山県の皆さん、お世話になりました。

次回、広島県は、大和ミュージアムの改装後の見学などが予定されているそうです。

島根県教神協総会

出雲支部 山崎 寧子

九月二十六日、島根県神社庁で行われた。総会は5名。令和六年度の事業報告、決算報告。令和七年度の事業計画、予算案が可決された。令和八年には、会員の神社巡りをしてはどうかという提案があった。

午後からの研修会は参加4名と寂しいかぎりであるが、令和七年に祭式の変更があったという事で、金築参事に講師をお願いした。一覧表を見ると、沢山の変更でめまいがしそうになっ

たが、記載が丁寧になった部分が多く、実際の変更点は、随員の作法、大床の作法の二点であった。その他、立礼での作法などの講義を受けた。私に取っての新たな発見は、一つ一つの行事の中では動作は重なっても良いが、修祓だけは、大麻は祓主と動作が重ならないようにするという事だった。

金築参事の教え方は、理由なども含めて教えてくださるのでとても理解しやすいと思う。

近年の参加人数が少なく残念に思う。次回は、是非沢山の方々に参加して頂ければと思う。



令和六年度事業報告

- ・ 六月二十一日
現職教員等研修
神社本庁 対面・リモート 二名参加
- ・ 七月八日
監査・役員会
出雲市個別指導塾F 五名参加
- ・ 八月八日、九日
第六十三回全教神協香川大会
高松市ホテルパールガーデン
サン・イレブン 二名参加
- ・ 八月二十四日、二十五日
中国ブロック研修会鳥取県
米子市文化ホール 二名参加
- ・ 九月七日
島根県教神協総会 研修会
立正大学湊南高校 五名参加
- ・ 十一月
島根県教神協会報発行
※神社庁例祭、
神社庁新年会、
出雲大社例大祭、
竹島平安祈願祭参列

令和七年度事業計画

- ・ 六月二十一日
現職教員等研修
神社本庁 対面・リモート
- ・ 七月十二日
監査・役員会
出雲市個別指導塾F
- ・ 八月五日、六日
第六十四回全教神協兵庫大会
射撃兵主神社・姫路キャッスル
グランヴィリオホテル
- ・ 八月二十日、二十一日
中国ブロック研修会岡山県
作楽神社・津山鶴山ホテル
- ・ 九月二十六日
島根県教神協総会 研修会
- ・ 十一月
島根県教神協会報発行
※神社庁例祭、神社庁新年会
出雲大社例大祭、竹島平安祈願祭

令和八年度事業予告

- ・ 八月
第六十四回全教神協 佐賀大会
中国ブロック研修会 広島県

会員寄稿

戦後八十年の酷暑

奥出雲 石原 道夫

今年は戦後八十年の節目の年ということで、靖國の遺児である小生は忙しい夏を迎えた。六月に十一日間、太平洋上を巡る洋上慰霊に出かけたり、酷暑八月の全国戦没者追悼式に参列したり、日本遺族会関係の諸会合や行事に出席したほか、東京九段に鎮まる「靖國神社」に二月十九日に続いて八月十四日にも参拝した。

「靖國神社」は小生が学生の頃に四年間神務実習した懐かしい神社であるが、そのころの白衣神職の方は皆無で、当時仲良くしていた方としては、神門で今も写真屋を営んでおられる「塚本写真館」だけになっ

てしまった。事程左様に戦後のどさくさが続く昭和三十年代と比較すると今や大きく様変わりした御社頭であり、神門を出入りする参拝者の数も心なしか少なくなっているように感じた。一方では、当時とは比べようもない程に完備した「遊就館」の佇まいがある。別けても、小中高の若者の拝観が多いと報じられ「僕は、修学旅行で沖縄の『ひめゆりの塔』に行きました。その際に戦争の悲惨さを実感し、この『遊就館』でも平和がどれだけ大切かを学ぶことができました」と、展示品の数々に感動した思いを述べた高校生の一文が貼りだされていた。

そうした折、毎月「靖國神社」から送っていた『靖國』九月号に「靖國神社と国を靖んずる力の源泉」とした特集記事があり、深く感銘を受けたので紹介したい。執筆者は「新しい教科書をつくる会」の伊勢雅臣氏であり、日頃から「我が国の将来を靖んずるためにも、靖國神社の意義を子供たちにどう伝えるべきか」の課題に真正面から取り組んでおられる。

最近、公立中学校の心あるベテラン社会科教師に、靖國神社を教える一時間の授業を実践してもらいました。そこで意外だったのは、その授業が「神様とは何か」から始まったことです。現在の中学校歴史教科書では靖國神社の記載どころか「神社とは」の初歩的説明もなく「神仏習合」に多少言及される程度で、そもその「神社とは…神道とは…」のきちんとした説明がされていないのです。ですから、生徒たちの心に届く授業をするためには、まず「神社とは」というところから始められたこのやり方には、ベテランらしい行き届いた心配りがありました。そのあとで「神話の神様、人間の神様、自然の神様」に触れる見事な導入をされ、そのうえで「靖國神社の神様は？」「靖國問題とは？」に対してスライドで簡潔、的確な説明をされました。そして、最後に行くと「『神話の神様、人間の神様、自然の神様』に『事実を知り、先人の想いを想像し、自分の頭で考えよう』と結ぶ授業でありました。

伊勢氏は、続いて授業を受けた生徒たちの感想文も紹介し、最後に自らの想いを「このよう

に感謝と志を確かに抱いた次世代の国民が、家族連れや若いカップルで靖國神社を参拝し、例大祭やみたま祭りが大賑わいとなる。そういう光景が、草葉の陰の英霊を慰め、近隣諸国への抑止力となり、そして靖國神社がますます国を靖ずる力の源泉になっていくでしょう」と纏めておられた。

「生きとし生けるものを尊ぶ神道は、日本人の伝統的な感性の中核である」と言われて久しい。この『靖國』九月号にあるように、靖國神社を学ぶことで、子供たちの心の中に潜んでいる日本人の感性が蘇れば「いいーナ」と願う、今年の節目の暑い夏であった。



戦後八十年 戻らぬ海没遺骨

奥出雲 石原 道夫

洋上慰霊の船旅が、日本遺族会主催で開催され、私も父の霊璽・龍笛を懷に参加しました。

国の助成を受け、四十二都府県二一八人の遺児たちが六月一日から台湾海峡・フィリピン沖合などを十一日間かけて巡る三回目（最終回）の旅です。

この度も客船・日本丸をチャーターし、航海中の海域ごとに慰霊式典を挙行（九回）したり、戦争反対と平和の大切さを後世に語り継ぐ「語り部」研修も開催。戦艦大和や武蔵の沈没海域を航行して慰霊の誠を捧げ、フィリピンのマニラへの寄港時には現地の子どもたちを船内に招いて交流会を開くことも組み込まれていました。

海上の毎日は、七階のスポー

ツデッキで開催される慰霊式典に出席することが中心でした。父を知らない八十歳代前半の遺児が「お父さん・お父さん…」

と呼びかける追悼の言葉に心魅かれて共に涙し、やりきれない遺族の思いを昇華させる時間でした。戦争映画の鑑賞でむせび、講話に耳を傾け、自分史や家族史の作成に挑むなど、有意義な日々を過ごしました。

私の父は南洋パラオ島沖の洋上で戦死しました。この度の航海はその海上までは行きませんのので、六月七日のパラオ島を遙かにしたレイテ島東方沖で行われた慰霊式に海域該当者（五十二名）の一人として臨みました。南海の煌々と照りつける太陽の下、海上から吹き上げる潮風を受けながら、デッキにはいつも通りの『洋上戦没者精霊位』と墨書きされた標柱が建てられ、各々が白菊を献じて拝礼、更に四階のプロムナード

デッキに移動して青海原に供物と切り花を納め、汽笛を合図に黙祷しました。

私は「親父：一緒に奥出雲に還ろうヨ」と龍笛を吹きながらの霊璽奉安祭。流れる涙と共に「戦死した親父たちは、今も六千メートルの海底に沈んだまま。戦後八十年、未だに戦後処理ができないのか」と無念が深まる慰霊の日々でありました。



新入会員紹介

大田支部 苅田神社 禰宜

壺倉 和良

私は、この度、大田市久手町にあります延喜式内社である苅田神社の禰宜を拝命するとともに、立正大学湊南高等学校教諭として、島根県教育関係神職協議会に入会させていただくことになりました。勤務地が松江市であるため、土日の祭りでご奉仕する二足のわらじでなかなか現在大変なものであると実感しております。学校の方では三年担任と進路を主に担当しているため、多忙な日々を追われ、自らのことが後回しになっております。この原稿についても失念しており、まだまだ何かと至らないところも多く、年ばかり重ね、50代半ばとなりました。

私の実家は、神主家系である羽根にある本壺倉の分家である

西壺倉家として代々苅田神社神主として務めて参りました。私で五代目となります。苅田神社は苅田彦命、苅田姫命をお祀りし、五穀豊穰稲作の神様を中心にお祀りしております。戦没者191名の御霊をお祀りする祖霊社も祀っています。また、大田地区ではかつて飢饉の時、サツマイモ栽培を伝承し、地域を救っていただいた代官井戸様をお祀りする小宮さまもあります。この地元のご先祖様方々が

大切にしてきたお社を何とか大切に守っていききたいという思いです。ただ、地方神社の宿命である氏子の減少は私の地域でもとどまることなく、厳しい状況が年々顕著になってきています。氏子の代替わりもなかなか難しく、祭りの引き継ぎ、総代さんの交代など難しい問題が山積しております。地方神社を支えてくださる若い氏子さん方の参加が増えることを願うばかり

です。諸先輩方の豊富な経験のうちが、島根県の多くの神社で抱えている課題に向き合いつつ、少しでも奉務神社を通じて島根県神社の活性化を図っていくことに尽力できればと考えております。まだまだお祭りの作法や習わし、所作や祝詞何一つとっても初心者マークの取れない身の上ですが、何卒ご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

戦後80年を迎え国民の多くが戦争を知らない世代となりまして。日本人が平和ボケしている間に近隣諸国は着々と軍備を増強し、他国では紛争が続いています。「話せばわかる」というのは、まったく通用しないのが良くわかります。平和である事が一番ですが、準備だけは怠ってはならないと痛感します。

高市内閣が誕生しました。ガラスの天井は破る事が出来ると証明されたので、今後、女性の一層の活躍が期待出来る時代になったとうれしく思います。

お忙しい中、玉稿をお寄せ下さった会員の先生方に感謝申し上げます。

(山崎 寧子)

